

「知識」という語彙が持つ もう一つの深い意味

今年には平城遷都1300年祭に当たるのでその関連番組をよく目にするが、奈良時代を象徴するものとしての大仏、東大寺建立に関する番組もある。

ある番組で、舞台上で火のついた松明を振り回す「お水取り」で有名な二月堂では、お堂の中では二月はインドの正月にあたるので仏への供養を行なわれているとか。

その供養の中には大仏、東大寺建立に携わった人々の名前が一人一人読み上げられる供養もあるよう。

だが、大仏建立にはたくさんの民衆も携わったが殆どは名もなき人々であり、その人たちは「役夫知識」という呼び名で供養されてるようで、「知識」とは「仏のために身を捧げて働いた人々のこと」でもあるとか。

「知識」という語彙にこんなにも深い意味もあることを知り、念のために広辞苑を調べてみた。

広辞苑には、「知識」の項目の最初に仏教用語の意味として、「イ）物事の正邪などを判別する心のはたらき。ロ）正しく教えるを導いてくれる指導者。ハ）寄進すること、また、その人たち。」と記されている。

大胆に云えば、つまり「人としての善悪を判断できるようになるために知識を学び、人としてのあり方を求めて人につくすことが人として道であり、そのために思考・思索する人こそが知識人」と言えるのでないだろうか。

「知識」の語彙にこうした深い意味があることに想いを馳せると、家庭や学校で、極言だが「子どもは余計なことを考えず、大人が教えることをただ黙って覚えろ！」に近いことを云うのは、昔人（むかしびと）が「知識」の語彙に込めて伝えようとした意味から大きくかけ離れているように思う。

「『勉強しろ！』と親がウザ（煩）イ！」とか、勉強嫌い、学校嫌いの子どもたちが増えているご時世だからこそ、まずは大人が、単に覚えなくてはならない物事のことを「知識」というだけでなく、語彙の持つ深い意味を意識すべきでないだろうか。

「知識」という語彙の持つ深い意味を意識しつつ子どもと係わり合えば、家庭・家族崩壊とか、学級・学校崩壊とか云われる世相を少しは改善していくヒントがありそうな気がするのだが…。